

●昭和20年に入ると、陸軍は「本土決戦」を声高に

▽「皇土決戦訓」を全軍に布告(4月20日)

「体当り精神に徹し、一億戦友の先駆たるべし」

国民スローガン

沖縄戦が絶望的になってきた20年6月、「一億特攻」の活字が新聞紙面に躍るようになった。「一億一心」に始まり「一億総動員」、やがて「一億特攻」、「一億玉砕」につながっていく。

●「決号作戦」を策定(1月19日)

▽日本の軍事史上では初の

陸海軍同一の 本土決戦作戦計画

▽本土決戦準備の重点は九州と関東平野

米軍の本土上陸は 秋以降と判断

8月末を目標に 作戦準備を完了することに

▽陸軍兵力はほとんど 南方 中国戦線に

本土には わずかに 8個師団と戦車1個師団

▽新たに 40個師団以上の編成が

必要になったが 容易ではなかった

「大本営機密日誌」から

「このように内地兵備は未曾有の規模をもって大膨張しようとしている。兵員はいよいよ質が低下するであろうし、さらにこれに要する装備はどうなるか、この大兵備を引受ける軍政当局の苦心は並々ならぬものだ」(2月14日)
「実に十二、三歳の少女に子供を産めというに等しい難問題であった」(2月22日)

▽陸軍省側が「兵備は数の多いのが良いのか、

少数でも充実したものがよいのか」

宮崎周一(機密)は「質より数を尚ぶ」

秦彦三郎(機密)も「本土上陸の第一波撃摧に失敗したら、その後の計画は不可能である。

従って持久戦はできぬ。絶対、後のことは考えぬ。まず第一波撃摧に全力を傾注する」

▽大本営は 2月26日

150万の「根こそぎ動員」実施を 決定した

— 本土決戦思想が生まれたのは —

「レイテ決戦」に敗れてからだった。大本営は昭和19年12月19日、「もはや戦勢挽回の目途なし」として、レイテ決戦放棄を決定したが、種村佐孝大佐(参謀本部戦争指導班長)は「大本営機密日誌」に書いている。

「こうなった以上、今後の戦争指導上、和戦の転機を何れに求むべきか、大本営として作戦の重点を何れに指向すべきか、は重大な問題となって来た。ここに、本土決戦思想が擡頭するに至った」

種村 佐孝(たねむら・さこう)

明治37(1904)～昭和41(1966)三重県生まれ。陸軍大佐。昭和14年参謀本部戦争指導班員となり19年7月班長。敗戦直前に第17方面軍参謀。シベリア抑留を経て25年帰国。著に「大本営機密日誌」

…… 動員施策は出尽くしていた ……

陸軍は開戦時51個師団227万の兵力でスタートしたが、戦局悪化と共にどんどん膨れ上がった。18年11月1日兵役法を改正、兵役最終年齢を5歳延長して45歳、12月24日には臨時特例で徴兵年齢を1年早め19歳に。朝鮮や台湾の徴兵制も実施した。

19年末の動員軍人総数は537万に達し、町や村には老人と女、子供しか残っていなかった。

宮崎 周一(みやざき・しゅういち)

明治28(1895)～昭和44(1969)長野県生まれ。陸軍中将。陸大教頭などを経て昭和19年12月参謀本部第1(機密)部長。戦後は復員庁史実調査部長

●大本営は、本土決戦態勢の整備を急いだ

▽「陸軍召集規則」を改正(3月29日)

満17、18歳の 全ての男子の

防衛召集 臨時召集が 可能になる

▽4月8日 東日本に第1総軍 西日本に第2総軍

航空部隊を統一指揮するため 航空総軍創設

▽戦艦「大和」が 沖縄特攻で撃沈(4月7日)され

壊滅状態の海軍も 25日 海軍総隊を創設

●小磯国昭内閣は、国民の「総軍隊化」を進めた

▽「決戦教育措置要綱」を 閣議決定(3月18日)

学校の授業は 国民学校初等科を除いて

4月1日から 21年3月末まで 原則停止

▽「国民義勇隊」組織の法案を 閣議決定(3月23日)

▽鈴木貫太郎内閣が 成立(4月7日)すると

「国民義勇隊組織二関スル件」

「状況急迫セル場合ハ必要地域ノ国民義勇隊ヲ

戦闘隊ニ移動サセルコト」が 決定され

15~60歳の男子 17~40歳の女子は

いつでも 戦闘に 狩り出されることに

●兵隊を召集しても、満足に小銃も渡せない状況に

…… 新聞にはこんな広告も ……………

「此ノ戦局!! 一億憤激シテ武器ヲ執レバ

勝利ハ我ニ在リ」(日本工業社)

▽狩猟家が持っていた猟銃は とっくに供出

中学校や 在郷軍人会にあった

三八式歩兵銃も 掻き集められた

▽200人の兵隊がいて 兵営には

小銃10挺だけなんて話は ザラだった

▽国民義勇隊を編成しても

隊員に渡す武器は 原始的な代物ばかり

…… 迫水久常(内閣書記官)の話 ……………

「陸軍省の係官から国民義勇戦闘隊に使用させる兵器を展示してあるので、総理以下閣僚に見てほしい」という申し入れを受けて、鈴木総理を先頭に一同見に行くと、「手榴弾はまずよいとして、銃というのは単発であって、銃の筒先からまず火薬を包んだ小さな袋を棒で押

「大本営機密日誌」(2月26日)

「この夜硫黄島には血戦つづき(19日)、内地には雪霏々として降る。二・二六当時の悲壮さを思わしめた」

小磯 国昭(こいそ・くにあき)

明治13(1880)~昭和25(1950)山形県生まれ。陸軍大将。軍務局長、次官、朝鮮軍司令官を歴任し、昭和13年予備役。14年平沼、米内内閣拓務相。17年朝鮮総督。19年7月首相に就任するが、戦局悪化で20年4月辞職。A級戦犯で終身禁固刑

―― 本土決戦に国民の全エネルギー ――

決戦教育措置要綱は「現下緊迫せる状態に即応するため、学徒をして国民防衛の一翼たらしむるとともに、真摯生活の中核たらしむる」。こう謳ってはいるが、全学徒を決戦に必要な業務に当たらせるため、事実上の学徒総動員だった。

また国民義勇隊は、兵役法とは関わりなく職場、地域単位で編成して、全国国民男女を防空・防衛・空襲被害復旧や疎開輸送・食糧増産・警防活動のほか、陣地構築・補給輸送など軍のあらゆる作戦行動に協力させようというもので、「状況急迫セル場合ハ武器ヲ執ッテ驟起スル」となっていた。

鈴木 貫太郎(すずき・かんたろう)

慶応3(1867)~昭和23(1948) 父親が代官をしていた関宿藩の飛び地、大阪・久世村で生まれる。海軍大将。大正13年連合艦隊長官、14年軍令部長。昭和4年1月予備役となり侍従長。二・二六事件で襲撃され瀕死の重傷。15年枢密院副議長。19年枢密院議長。20年4月首相に就任し「聖断」で終戦に導く。20年12月、枢密院議長に再任。著に「鈴木貫太郎自伝」

しこみ、その上に鉄の丸棒を輪切りにした弾丸を、棒で押し込んで射撃するものである。それに、日本在来の弓が展示してあって、麗々しく、射程距離、おおむね三、四十米、通常射手における命中率五〇%とかいてある。…その他は文字どおり、竹槍であり、昔ながらのさす叉である」。鈴木首相も思わず「これはひどい」とつぶやいたという。

▽陸軍は「国民抗戦必携」の

パンフレットを作り 一般に配布(4月25日)
最新式兵器の米軍には 絶望的な 一億玉砕戦法
—「休戦は焦眉の急」と若槻礼次郎—

今度は内地で本土決戦をするという。本土決戦というのは、内地を焦土とするだけの話で、そんな馬鹿なことはないのである。私は東京から伊東へ帰る途中、神奈川県巡査が護衛だとかいってついてくるが、その巡査の話に、どこかの警察が焼けて、折角集めた三百挺の猟銃が焼けて困っていると、その巡査が笑って話した。伊東へ帰って、床屋を呼んで髪を刈らせながら、近ごろはどうだいという、その床屋が、毎日朝早く起きて、あそこの広場で竹槍の稽古をしているという。そしてそれは「本土決戦ですから、敵がきたら竹槍をもって戦うのです」というのである。まことに正気の沙汰とは思えない。大砲や、機関銃や、戦車、飛行機に向かって猟銃や竹槍で対抗しようとするのは、いわゆる螳螂の竜車に向かうの類である。休戦はもはや焦眉の急といわなければならない。(「古風庵回顧録」から)

●食べるものも、なくなっていた

▽連日連夜の空襲 関門海峡 港湾には機雷投下
日本海にまで 潜水艦が入り込み
完全に封鎖された日本列島で 飢えとの戦いが
▽配給米の中で 米の占める比率が急減
6月51%だったのが 7月42%と落ち
代わって大豆が 6月23% 7月には45%に

迫水 久常(さこみず・ひさつね)

明治35(1902)～昭和52(1977)鹿児島県生まれ。岡田啓介の女婿。大蔵省に入り岡田首相秘書官を経て大蔵省銀行局長の時、鈴木内閣書記官長に就任、終戦実現に努める。戦後衆院議員、参院議員となり池田内閣で経企庁長官、郵政相。著に「機関銃下の首相官邸」

……「国民抗戦必携」……

銃、剣はもちろん、刀、槍、竹槍から鎌、ナタ、玄能、出刃包丁、鳶口に至るまで、これを白兵戦闘兵器として用いる。刀や槍を用いる場合は、斬撃や横払いよりも、背の高い敵兵目がけてぐさりと突き刺した方が効果がある。ナタ、玄能、出刃包丁、鳶口、鎌などを用いるときは、後から奇襲すると最も効果がある。正面から立ち向った場合は半身に構えて、敵の突き出す剣を払い、瞬間胸元に飛びこんで刺殺する。なお、鎌の柄は三尺位が手頃である。格闘になったら「みずおち」を突くか、拳丸を蹴る。あるいは唐手、柔道の手を用いて絞殺する。一人一殺でよい。とにかく、あらゆる手を用いてなんとしても敵を殺さねばならない。事態は最早「肉を斬らして骨を断つ」ではなく、「骨を斬る」が自分も「骨を断られる」ところまでに至っている。しかし、断じて屈せざる気魄のあるところ戦は必ず勝つ。

若槻 礼次郎(わかき・れいじろう)

慶応2(1866)～昭和24(1949) 島根県生まれ。蔵相、内相を経て大正15年首相に就任するが、昭和2年の金融恐慌で総辞職。5年ロンドン会議首席全権として軍縮条約調印。6年再び首相就任したが満州事変が勃発、8か月で退陣に追い込まれる。著に「古風庵回顧録」

添田知道の日記から(5月19日)

「何しろ、豆粒ばかりに見えるご飯である。郵便のために、封筒を張り、切手も緘がついていないのだが、それをやる時に、お櫃を覗き込んでよく探さないと、飯粒のつもりで塗っていても、豆粕なので一向に貼れないのである」

▽米の国内生産量は 昭和16年でも 6,087万石
消費量7,137万石には 1千万石も足りなかった
朝鮮 台湾など 外地に頼っていたのが
日本列島が 封鎖されては 飢えるのも当然

▽食糧の大幅減配を しなければならなくなり
石黒忠篤(麒麟)は 国民の決起を促すため
早期発表を訴えたが「沖縄戦がすむまでは、
戦意を喪失するからいけない」

▽結局 沖縄戦の終わった 7月3日
主食の配給量を1割減 11日から 1人1日2合1勺
雑穀まじり 配給そのものも 遅れがちに

●東京の市街地は、半分以上、85万戸が焼失

— 植草基一(うゑくさ・きいち)の日記から(5月19日) —

「空襲ヲウケルコトハ皆ノ本当ノ商売ノ様ニ
ナッタ、ナイトソノ合間ニ感情ノモツレガ露
骨ニナル、アルトソレガ消滅スル、戦争ノツツ
ク限り、適当ナ空襲ガ必要トナッテシマッタ」

▽エノケン(格 榎本健一)は 5月24日に焼け出され
シェパードの犬小屋に ベッドを置いて寝起き
高座へ通って 開口一番
「もうすみました」 観客は 大笑いしたという
▽防空壕暮らしも 増えた
6月末で 7万1千世帯 23万5千人
警視庁は「壕舎生活指針」で 湿気対策訴える

●日本中が、地下に潜るようになっていた

▽信州松代への「大本営移転」計画もあったが…
天皇には 東京を離れる意思は なく
木戸幸一(内相)も「松代へ行けば、もうおしま
いだ。結局、洞窟の中で自殺する以外になくな
ってしまう。そこまで行けば国が滅んでしまう」

添田 知道(そだ・ともち)

明治35(1902)～昭和55(1980)東京生まれ。作詞家。「ラッパ節」で有名な添田唾
蟬坊の長男。「パイノパイノ節」の「スト
トン節」や「東京節」を作る。昭和38年に
「演歌の明治大正史」で毎日出版文化賞

石黒 忠篤(いくろ・ただあつ)

明治17(1884)～昭和35(1960)福島県生
まれ。農林次官、近衛内閣農相を経て昭
和20年4月鈴木内閣農商務相。戦後27年
に参院議員。著に「農政落葉籠」

…… 石黒の「農政落葉籠」から ……

私はなるべく早い方がいい、これ
では生きて行けぬ、との世論が起こり、
戦争をやめる世論になってもいいで
はないか、— 食糧が不足して戦争を
やめねばならん、— ということ食糧
主管大臣が言い、戦争をやめること
になった責任を私がとるということ
にしてもよい。軍はまだ勝つ見込み
があったんだが、食糧がなくなった
ので戦争をやめるということにすれ
ば、軍の面目は立つ。悪いのは食糧主
管大臣だ、ということにすればよい、
とまで言ったが、まあ沖縄戦がすむ
まで待て、という。

植草 基一(うゑくさ・きいち)

明治41(1908)～昭和54(1979)東京生ま
れ。評論家・随筆家。東宝に入社、戦後フ
リーとなり、外国映画からジャズ、欧米
小説、現代美術など幅広く評論に活躍

エノケン(格 榎本健一)

明治37(1904)～昭和45(1970)東京生ま
れ。喜劇俳優。昭和4年浅草でカジノ・フ
ォーリー結成に参加、歌あり、芝居あり
で、映画に舞台に喜劇王時代を築く。30
年脱疽で右足首切断、再起不能を心配
されたが、不自由な体で舞台を務めた

▽皇居が 空襲被害(4月13日)を受けると
近衛第1師団に「吹上防空室」の工事命令

●陸海軍は、戦勢挽回に特殊兵器の開発を急いだ

▽頭文字を○で囲んで 秘匿名に

風船爆弾は「マルフ」「フ号作戦」

「風船爆弾」

第1号は昭和19年11月3日、千葉県一宮など太平洋岸から、米国西海岸に向けて放たれた。和紙を貼り合わせて直径10㍍の巨大な風船を作り、水素を詰め込み、焼夷弾、爆弾を吊して、冬の偏西風に乗せ、米本土を攻撃しようとした。所詮は風任せ。山火事でも起こして騒ぎになればいいと、心理的効果を狙ったものだった。春になると、風速が落ち、風の方向も一定しなくなるので、2月末で生産は打ち切られた。3月までに9千個飛ばし、外電はモンタナ州で山火事が起きたことを報じている。

▽陸軍が 開発に力を入れた「マルケ」

「マルケ」

「決戦兵器」の頭文字からとったもので、目標が放射する赤外線をつかえて突進する爆弾。

爆撃機が1万㍍の高空から敵空母や戦艦におおよその照準でこの爆弾を投下する。高度2千㍍になると爆弾はタイマーにより照準装置が作動し、目標の発する熱線を探して捕捉、翼のついた爆弾は左右の舵を切りながら敵艦船に命中炸裂、百発百中を狙った誘導弾だった。

昭和19年5月下旬、陸軍兵器行政本部に大学、東芝や住友通信工業などのメーカーを集めてプロジェクトチームを作り、開発を急いだが、戦争には間に合わなかった。

▽海軍は 木製の体当り機「桜花」に 大きな期待

「桜花」

発案者は、昭和3年に呉海兵団に入り、厚木基地輸送機の偵察員をしていた大田正一特務少尉。「人間爆弾」の青写真を作って、司令に上申すると、飛び付いたのが源田実大佐。木村秀政

松代大本営

松代盆地には、しっかりした岩盤を持ち、空からの攻撃にも耐えられる象山、皆神山があり、神の国「神州」に通ずる意味もあった。

19年11月約7千人を動員して突貫工事が始まり、敗戦までに総延長13㍍、床面積2万6千平方㍍、1万人を収容できる地下大本営の8割が完成した。戦後は一時戦災孤児の収容施設になったが、現在は東大地震研究所、しいたけ栽培に利用されている。

木戸 幸一(きと・こういち)

明治22(1889)～昭和52(1977)東京生まれ。維新の元勳木戸孝允の妹の孫。昭和5年内大臣秘書官長。文相、厚相歴任。15年内大臣に就任。開戦前、後継首相に東条を推挙したが、戦争末期、反東条となり倒閣、終戦に尽力。A級戦犯で終身禁固刑。30年出所。著に「木戸幸一日記」

吹上防空室

5月25日、工事命令が出され、防諜上「1号演習」と呼ばれた。12㍍爆弾の直撃に耐えられるよう鉄筋コンクリート、土砂で九層にし、一番上に草木を植えてカムフラージュ。高さ14㍍の小山が出現したようだったという。

源田 実(げんた・みのる)

明治37(1904)～平成1(1989) 広島県生まれ。海軍大佐。開戦時、第1航空艦隊参謀として、真珠湾攻撃作戦計画に参画。戦後、航空自衛隊に入り、昭和34年航空幕僚長。37年退官し参院選出馬(当選3回)

木村 秀政(きむら・ひでまさ)

明治37(1904)～昭和61(1986) 北海道生まれ。東大航空研究所教授、戦後は日大教授。昭和32年、日本初の国産旅客機Y S-11の設計に携わる

(東大航空研究所教授)に依頼し、大田のプランを設計図にまとめた。大田の名前をとり、「マル大兵器」と呼ばれたが、大量の爆薬を詰めた一人乗り小型機を、一式陸上攻撃機の胴体に吊り下げて目的地まで運ぶと、後は自力で敵艦船を攻撃できるようロケットを噴射して体当たりさせようというものだった。

強化木材で翼を作り全長は6m。試作1号機が完成したのは19年9月12日。制式名称は桜花。海軍の期待は木製の翼で量産が期待できること。一式陸攻が航空魚雷を発射するには、敵艦に1千m～800m近付かなければならないが、桜花なら一式陸攻は20%～25%離れた所で切り離せばいい。航空魚雷は時速75%、敵艦が発見すれば退避行動をとれるが、桜花は400%から450%、ロケット噴射すれば650%も出て、退避の余裕はない。しかも人が乗って操縦、命中率はぐんと高くなる。

▽昭和19年10月1日 鹿島灘沿いの神之池基地に桜花特攻部隊の 第721航空隊を編成
「神雷部隊」と命名 飛行隊長は
歴戦のパイロット 野中五郎少佐
二・二六事件の 野中四郎大尉の弟

●桜花部隊は、目標到達前に全機撃墜された
▽敵機動部隊が沖縄沖に迫った 昭和20年3月21日
九州鹿屋基地から 一式陸攻18機と
掩護戦闘機10機が出撃

▽米軍レーダーは 10%先でキャッチ
戦闘機隊が 待ち伏せ態勢

▽桜花は 重量2,400%
一式陸攻は 燃料を余計に搭載
その分 スピードが落ちて
敵戦闘機の 絶好の餌食に

●大本营は、「防空戦闘」制限の方針
▽本土決戦を前に
「桜花」は 見直しを迫られ
「マルケ」も 完成の見込みが立たない

野中 四郎(のなか・しろう)

明治36(1903)～昭和11(1936)青森県生まれ。陸軍大尉。二・二六事件で歩兵第3連隊中隊長として警視庁を占拠。29日反乱が失敗、陸相官邸で自決。父は日露戦争に従軍した退役陸軍少将野中勝明

宇垣纏(中)は日記「戦藻録」に

「壕内作戦室に於いて、敵発見桜花発進の電波に耳をそばだてつつ待つこと久しきも、杳として消息なし。今や燃料の心配をなし『敵を見ざれば南大東島へ行け』と令したるも之亦何等応答するなし。其内掩護戦闘機隊の一部帰着し、悲痛なる報告を致せり。即、一四二〇頃敵艦隊との距離五～六〇哩に於いて、敵グラマン約五〇機の邀撃を受け空戦、撃墜数機なりしも我も亦離散し、特攻は桜花を捨て僅々十数分にして全滅の悲運に会せりと。嗚呼」

宇垣 纏(うがき・まとめ)

明治23(1890)～昭和20(1945)岡山県生まれ。海軍中将。軍令部作戦部長を経て開戦時、連合艦隊参謀長。昭和20年に第5航空艦隊長官(艦長)となり、沖縄戦の特攻攻撃を指揮。終戦当日、自ら特攻出撃して戦死した。遺稿に「戦藻録」

米軍機本土襲撃状況	月	B29	P51	中小戦爆	艦載機
	4	16回 1997	4回 230	1回 100	1回 30
5	20回 2738	4回 260	1回 70	3回 1825	
6	25回 3227	4回 255	4回 400	3回 737	
7	34回 3552	16回 1813	13回 3352	9回11831	

- ▽本土防空担任の 陸軍第10飛行師団も
 - 2月の艦載機(16、17日 11機、600機繰) 迎撃で自爆 未帰還 51機を出し
 - 多くの 熟練パイロットを 失っていた
- ▽残存航空戦力を 温存し
 - 敵上陸船団に対する「全機特攻」に当てる方針

●本土空襲は、激化の一途をたどっていた

- ▽B29は 4月から 毎月 満遍なく 2千機から3千機
- ▽硫黄島が落ちると 4月から

長距離戦闘機P51が 関東・東海地区に

- ▽6月以降は 沖縄から 戦爆連合で 九州地区に
- ▽これに 機動部隊の艦載機と

日本中の空を 敵機が 飛び回っているのに 迎撃する日本機が ほとんど 見えなくなった

- ▽サイパン 硫黄島 沖縄など 外地の戦いは 適当にごまかされた 大本営発表で 知るだけ
- 本土防空では 反撃する力もないことを 国民が 自分の目で 見ることになった

- ▽戦後 米戦略爆撃調査団の調査によると
- 昭和19年2月に 敗戦を考えた国民は 2%
- サイパン陥落と B29の空襲から 増え始め
- 19年12月10% 20年3月19%
- 沖縄戦が絶望になった6月には 46%に
- 清沢冽の「暗黒日記」(4月12日)

「どこに行っても戦争は、いつ終るだろうかという点に話題が向けられて行っている。誰も戦争に飽いたことが推知される」

●日本の国力、戦力は、もう限界に達していた

- ▽鈴木(淵)は 組閣直後 各閣僚に 所管事項の現状と 見通しを 調査させた
- ▽迫水と 秋永月三陸軍中将(給餉顧問)が 幹事役となり 陸海軍の軍務局などを 総動員 1か月近くかかって 調べ上げた

迫水の話

「ちょうど陸海軍も振り絞り得る最後の力を 知りたがっていたので、その話に乗ってきた。皮肉な言い方をすれば、現状と見通しを 知れ

清沢 冽(きよさわ・きよし)

明治23(1893)～昭和20(1945)長野県生まれ。明治39年渡米し邦字新聞記者。大正9年中外商業新報初代外報部長。昭和2年朝日新聞企画部次長。報知新聞論説委員を経てリベラルな反軍政治評論で活躍。著に太平洋戦争中の「暗黒日記」

渡辺一夫(渡辺)の日記(6月12日)

「…日本は米軍に包囲され、まさに自殺しようとしている。何千何万という民家が、そして男も女も子供も一緒に、焼かれ破壊された。夜、空は赤々と照り、昼、空は暗黒となった。東京攻囲戦はすでに始まっている。戦争とは何か、軍国主義とは何か、狂信の徒に牛耳られた政治とは何か、今こそすべての日本人はそれを悟らなければならない」

渡辺 一夫(わたなべ・かずお)

明治34(1901)～昭和50(1975)東京生まれ。フランス文学者。東京高校教授を経て昭和23年東大教授。退官後立教大、明治学院大教授。趣味人として多彩で、30年に日仏親善の功績でフランス政府からレジョン・ドヌール勲章を贈られる

「高松宮日記」(5月8日)

「麦ガ穂ヲ出シタ。一昨年モ麦ヲ蒔イテコレガ獲レルマデ無事カト思ツタ。昨年モ畑ヲ見テイツマデ続ケラレルカト考ヘタ。今モ庭ノ美シサ、草木ノ育ツノヲ見テ愈々来年トハ云ハズ秋ハドウナルカト、ヤハリ淋シサニ堪ヘヌ。道真ノ『東風吹かば』ノ歌ガシミジミト想ハレル」

高松宮 宣仁親王(たかまつのみや・のぶひと)

明治38(1905)～昭和62(1987)大正天皇の第3皇子。海軍大佐。戦争中、軍令部参

ば、バカでない限りいやになる。この戦争が到底継続できるものでないことがわかる。すると閣内から終戦和平の声が起こってくるだろう。これが鈴木 of 狙いではなかったかと思う」

▽本土決戦論など 実際には 不可能なことを数字の上から 確かめようとしたのだ

●迫水は5月上旬、鈴木に「驚くべき結果」を報告した
▽鉄鋼生産は 計画では 20年は300万ト

1月以降の実績は 月平均10万ト、足らず 3分の1
飛行機も 月産1千機の予定が 半分も出来ず
原料のアルミニウムが なくなって

9月以降 計画的生産の見込みが 立たない

▽石油は 全く 底をついて

艦隊は 重油に 大豆油を混ぜ 使っている有様

▽空襲被害も 予想以上に 大きく

B29 1機当たりの焼失戸数は 270戸余り

9月末まで 人口3万以上の都市は 消滅する計算

船舶も 年内には 1隻もなくなってしまふ

迫水の結論

「要するに、日本の生産は九月末までは、どうか組織的に運営されるだろうが、それから先は全く見当がつかない。その上、ソ連も兵力をソ満国境にどんどん集めており、この状況では九月までに、何とか戦争の終末をつけないければならないということであります」

▽鈴木(翻)も

「七、八月頃には重大な危機に直面する」

日本の知性を集めて「三年会」

加瀬俊一(重光外務顧問)の呼びかけで、昭和20年1月11日、麹町三年町の外相官邸で第1回会合を開いた。会の目的を「日本の将来を考える」。メンバーは作家の山本有三、志賀直哉、武者小路実篤、東大教授和辻哲郎、田中耕太郎、富塚清、一高校長安倍能成、法政大教授谷川徹三と9人で、文化勲章5人、文化功労者1人。

謀、砲術学校教頭。戦後は国際文化振興会総裁など。海兵在学中、大正10年から書き続けられた「高松宮日記」(20冊)

宮崎周一(中将)の日記(5月2日)

「予曰ク 一体此戦争ノ終末ヲ何レニ帰着セントスルヤ 大東亜戦争前カ、日支事変前カ、満州事変前カ、日露戦争後カ前カ、更ニ遡テ御維新ナルベキヤ…」

大来 佐武郎(おきた・さぶろう)

大正3(1914)～平成5(1993)中国大連生まれ。戦時中は興亜院、大東亜省に勤務し、戦後は経済安定本部で「経済白書」の執筆責任者。経企庁で池田内閣の「国民所得倍增計画」を策定。昭和54年に大平内閣外相となり「民間人外相」として話題に。58年国際大学初代学長

富塚 清(とみづか・きよ)

明治26(1893)～昭和63(1988)千葉県生まれ。東大工学部教授。戦後、明大、法大教授。著に「ある科学者の戦中日記」

……「ある科学者の戦中日記」(4月11日)……

富塚清は「大東亜省の大来佐武郎氏が来る。彼は日本の戦争能力の調査をしているそうだが、今後できることは竹槍戦争しかないという結論に達した由である」とこう書いている。「敗戦後日本は徹底的に軍備の制限を受けると思うが、それがかえって日本の幸になるかも知れない。日本は一等国としての資質は持っていないが、二等国としての資質は立派に持っているのである、云々」

富塚も共鳴して「軍備の全面撤廃がきたって、よろこびこそすれ、めそめそはしない。軍備というものだって、カーキ色の服の下の軍備だけが軍備ではない。セピロ服の下の、科学技術

●鈴木内閣の終戦工作の難しさは、陸軍の認めない終戦は、終戦にならないことだった

▽陸軍は 阿南惟幾を 陸相として入閣させる際

「飽く迄大東亜戦争完遂」を 第一条件に

▽鈴木自身「この内なる確信は、当時としては深く内に秘め、だれにも語り得べくもなく、余の最も苦悩せるところであった」

▽終戦の本心は 一切見せずに「聖戦完遂」を説き内閣声明でも「国民よ、わが屍を越えて行け」

迫水の話

「もし最初から鈴木総理が終戦への兆候を見せられたら、陸軍はいち早く内閣をつぶしていたであろうから、日本が果してあの最終の時期に終戦しえたかどうか、したがって戦後の復興が今日の如くすみやかに行われえたかどうか判らない。まことに鈴木総理の深い思慮であったと思う」

最高首脳は「ソ連に和平仲介依頼」で合意

ソ連は4月5日、日ソ中立条約の不延長を通告してきた。「ソ連参戦は何としても防ぎたい」との陸軍の希望で、5月11日に最高戦争指導会議の構成員会議(首相、外相、陸相、海相、参謀総長、軍令部総長)が開かれ、この6巨頭会議で14日、「ソ連に和平仲介を依頼すること」で合意が出来、「他言無用、秘密厳守」を申し合わせた。

▽陸軍は 今後の戦争指導方針を

「一億玉砕を賭して本土決戦を断行する」

この趣旨に確立に 御前会議開催を申し入れ

▽迫水は「この機会に終戦への努力の緒を啓いておくのも一方法」と考え 提出書類の準備に

●5月23日深夜、瀬島龍三中佐が迫水を訪ねて来た

▽迫水は「内外の戦局は、わが国にとって極めて悪い。陸海軍は本土決戦を強く主張しているが、

本当に勝ち目はあるのだろうか」と 切り出した

▽瀬島さんは 国家 民族にとって 重大事と思い

「現在の私の立場を離れて、

個人として、本心を申し上げる」

力や敢闘精神は、いずれも潜在的軍備である。今度の日米戦もカーキ色がセビロに負けたのだともとれる」

加瀬 俊一(かせ・としかず)

明治37(1904)～平成16(2004)千葉県生まれ。昭和15年松岡外相秘書官となり、開戦時北米課長。情報部長を経て18年重光外相秘書官。戦後はユーゴ大使、国連大使、外務省顧問。慶応大学などで外交を講義。著に「戦争と外交」

阿南 惟幾(あなみ・これか)

明治20(1887)～昭和20(1945)東京生まれ。陸軍大将。中佐の時に昭和4年から4年間、鈴木が侍従長時代に侍従武官。陸軍次官、第2方面軍司令官、航空総監。20年4月鈴木内閣陸相となり、ポツダム宣言で条件付受諾を主張。敗戦の夜自決

瀬島 龍三(せじま・りゅうぞう)

明治44(1911)～平成19(2007)富山県生まれ。陸軍中佐。二・二六事件で射殺された岡田首相の義弟で秘書官の松尾伝蔵大佐の女婿。大本営参謀を経て20年7月関東軍参謀。シベリアに11年間抑留。帰国後、伊藤忠に入社し会長。臨時行政改革推進会議議長。著に「幾山河」

迫水は長男に手紙を書いた

迫水は眠れないまま、長男久正に手紙を書いている。「この戦争がどうなっていくかによって、若しお父さんが御国に殉じたというようなことを聞く場合があったら、決して悲しんだり、あわてたりしてはいけない。お前の雄々しい心の中にこそお父さんは生きているのだ」

その日付は、5月24日付だった。

瀬島さんの提言

「今、考えなければならないことは二つある。一つは「ソ連の対日参戦」、もう一つは「本土決戦」の問題である。私の判断するところ、特に伝書使旅行のときのソ連軍の東送状況、ソ連の中立条約不延長などよりして、必ずや北満が厳冬期を迎える九月以前に対日参戦するであろうと考えられる。これは、我が国の戦争遂行に決定的な影響を与えると思う。

また、本土決戦については、従来の太平洋における離島作戦と異なり、陸軍の大兵力をある程度集中使用し得るので、その点有利であるが、その成否の見通しは、四分六分と言わざるを得ない。それは、陸海軍の航空戦力がほとんど皆無に近いからである。ことに本土決戦の場合は婦女子を巻き込み、全国土は完全に焦土と化し、その結果は、戦後日本の復興も国体護持もともに不可能となるであろう。要は、ソ連参戦前に戦争終結を策すべきである」

▽迫水は「龍三さん、有難う。本当のところがよくわかったような気がする。鈴木総理にも報告し、一身を顧みずに戦争終結に努力したい。お互いに、国のために努力しよう」迫水42歳 瀬島33歳

▽瀬島さんは 7月1日付で 関東軍参謀に転出
シベリア抑留を経て 二人が再会したのは
11年後の昭和31年8月 品川駅のホームだった

●御前会議は6月8日開かれ、「今後執ルベキ戦争指導ノ基本大綱」を決定した

▽強気一点張り 精神主義的な 本土決戦論

▽米内光政(翻)の特命で 密かに 終戦工作の

高木惣吉(翻)が「八千万の運命を定むる最後の土壇場に、この人達は空疎な形容詞の陳列を以て、自らの良心を寝かしつけたとしか思えない」と嘆くようなものだった

▽しかし 基礎資料「国力ノ現状」では

悲観的な国内状況を 率直に 認めていた

表向きは「あくまで戦争継続」を 謳いながら
その一方で「もう、とても戦えない」

ソ連は極東へ軍隊を送っていた

2月のヤルタ会談で、ソ連は「ドイツ降伏後2、3か月で対日参戦」を約束していた。4月に入ると続々と軍隊を極東に送り始め、総兵力は推定150万、飛行機4,900機、戦車3,700台。

大本营には「越冬準備をしていない部隊」、つまり、「夏には行動開始が予想される」との報告が来ていた。

「今後の戦争指導の基本大綱」

方針 七生報国ノ信念ヲ源カトシ地ノ利人ノ和ヲ以テ飽ク迄戦争ヲ完遂シ以テ国体ヲ護持シ皇土ヲ保衛シ征戦目的ノ達成ヲ期ス

米内 光政(はかい・みつまさ)

明治13(1880)～昭和23(1948)岩手県生まれ。海軍大将。昭和11年連合艦隊長官となり、12年林内閣海相。第1次近衛、平沼内閣に留任。15年首相に就任したが、日独伊三国同盟に反対、陸軍の協力が得られず辞職。19年7月現役に復帰し小磯、鈴木内閣海相。終戦に尽力した

高木 惣吉(たかぎ・そうきち)

明治26(1893)～昭和54(1979)熊本県生まれ。海軍少将。海軍省調査課長を経て昭和19年3月教育局長。米内海相の特命で9月から軍令部出仕となり、終戦工作に当たる。著に「私観太平洋戦争」

「国力ノ現状」

要旨 戦局ノ危急ニ伴イ陸海交通並ニ重要生産ハ益々阻害セラレ食糧ノ逼迫ハ深刻ヲ加工近代的物的戦力ノ綜合發揮ハ極メテ至難トナルベク民心ノ動向亦深く注意ヲ要スルモノアリ従ッテ之等ニ対スル諸施策ハ真ニ一瞬ヲ争フベキ情勢ニ在リ

● 迫水は、「国力ノ現状」を纏めるに当たって

▽秋永(給誦副官)に 協力を求め

毛里英於兎(もり・ひでおと=6月に新設の戦災復興課長に就任)

美濃部洋次(第1部長に就任)の3人で 作成することに

▽5月30日 どうやって

報告書を作成するか 話し合った

— 3人には、開戦前の判断に苦い思い —

企画院で「物的国力の見通し」を纏めた際、その結論は「臥薪嘗胆策は、物的国力の点から成立しがたい。戦争に踏み切った場合、次の年には物的には心配はなく、3年目には物的国力は戦争をした方がよくなる」

開戦前、アメリカの生産力は少なくとも日本の10倍はあった。日本が長期間、戦うには最初から無理があったが、開戦早々、南方の資源さえ押さえてしまえば、後はそれを国内に輸送、軍需生産を拡大出来る。こう考えたのが、いかに甘かったか。空襲、潜水艦攻撃で重要資源を運ぶ船がやられてしまえば、軍需生産が落ち込むのも当然だった。

▽判断の誤りを 繰り返さないためには

事実だけを 語ることにし

せいぜい 1か月か2か月先

7、8月までの予測に 止めることに一致した

▽また 現在 国民が

何を考えているのか 何を望んでいるのか

特に「民心ノ動向」を載せて

宮中や 陸海軍首脳に 読んでもらうことにし

国民の士気低下も はっきり 指摘した

● 御前会議に先立ち、最高戦争会議(6月6日)で議案審議

▽「戦争指導大綱」の起草で もめたのは

「一億玉砕」の言葉を 入れるかどうか

▽陸軍は「根本方針を明確にするためにも必要」

内閣側が 反対して 削除させた

▽参謀本部は納まらず 阿南陸相の所に持ち込み

「勝利か しからずんば 死か」の 挿入復活を

▽阿南は「死などという言葉は、国民に衝撃を

与える」と 許さなかった (吉備正雄陸軍参謀局長の話)

「企画院の四天王」

秋永は昭和2年に陸軍の派遣学生として東大経済学部で3年間学び、以来商工省企画調整官、企画院第1部長として軍人エコノミストの道を歩んだ人。迫水が企画院の課長時代、昭和15年から16年にかけて、毛里、美濃部の4人は一緒に仕事をして「企画院の四天王」といわれた仲だった。

…… 石炭も飛行機もひどい状況 ………

石炭から見ようということになり、5月31日、東京瓦斯の石炭課長を首相官邸に呼んだ。満州、樺太の石炭はもうとくに本土には来なくなっていて、命綱は北海道、九州の石炭。

ところが19年夏まで1日21往復していた青函連絡船は、13運航が精一杯。1日1万トンの石炭を送るには17~20本の石炭列車が必要だが、空襲で無理。中枢地帯の工業は、中期以降、石炭供給の途絶で相当部分の運転休止が予想された。

航空機も軍需省航空兵器総局は4月1,567機、5月1,592機生産見込みとしているが、水増し数字だった。三菱や中島飛行機では空襲でエンジン生産が出来なくなっていて、首なし飛行機、つまり発動機、プロペラのない飛ばない飛行機の数字まで足したものだ。実際の完成機数は、4月が411機、5月も500機あるかどうかだった。

「民心ノ動向」

国民ハ胸底ニ忠誠心ヲ存シ 敵ノ侵寇ニ対シテハ抵抗スルノ気構ヲ有シアルモ 他面 局面ノ転回ヲ冀求スルノ気分アリ 軍部及政府ニ対スル批判逐次盛トナリ 動モスレバ 指導層ニ対スル信頼感ニ動揺ヲ来シツツアル傾向アリ 且 国民道義ハ頹廢ノ兆

▽内閣側は「終戦を考慮する」意味の字句を挿入させようとしたが「思うように出来ず」代わりに「飽ク迄聖戦完遂」を削除しようとしたものの 陸軍は 反対する

▽迫水は「国体ヲ護持シ皇土ヲ保衛シ」(脚躰)を利用し「国体護持と皇土保衛を戦争目的とし、この目的が達せられるのであれば、終戦すべき」

こう 解釈することを提議し 承知させた

▽陸軍が「国力ノ現状」が 悲観的過ぎるとして 修正を要求したが 秋永は「報告はそのまま 本当のことを記すべきだ」と はねつけた

▽4日 草案は出来たが 鈴木(訥)は不満そうだった 迫水は「どうせ総理の進むべき道を 変更しないという決心さえあれば、今のところは陸軍を怒らせないように、事をうまく運ぶのが適当かと思えます」

迫水の話

「こうした文書はある範囲の官庁に配布しなければならぬ。自然、戦争継続論者の目に触れることも覚悟しなければならぬ。その場合の結果を恐れて、文面はあのように強気のものにしておくことにしたのだ」

●6日の最高会議は、10時間の長時間に及んだ

▽迫水が「戦争指導大綱」について

「アメリカを破ることは最早望みがない。それで皇土を保衛し国体を護持し得れば、この戦争は完遂されたことになるというのが、冒頭の方針に謳われた趣旨です」

▽提案理由を説明すると 東郷茂徳(畑)が「なぜ、その意味をはっきりするように書かないのか」

▽迫水が「はっきり書くことには寧ろ弊害」

和平のことは うっかり 口に出せない時

迫水の狙い通り「国体護持と皇土保衛」が

「終戦条件」として 最高会議に 認知される

●御前会議(8日)で、列席者は「陛下憂色に包まる」

▽予め 決めてある議案を

天皇の権威で承認する 形式的なもの

アリ 又 自己防衛ノ觀念強ク敢闘奉公精神ノ昂揚充分ナラズ 庶民層ニハ 農家ニ於テモ 諦観自棄的風潮アリ 指導的知識層ニハ 焦燥和平冀求気分底流シツツアルヲ看取ス カカル情勢ニ乗ジ一部野心分子ハ變革的企図ヲ以テ蠢動シアル形勢アリ

沖縄作戦最悪ノ場合ニ於ケル民心ノ動向ニ対シテハ特ニ深甚ノ注意ト適切ナル指導ヲ必要トス

— 米内(淵)は、どう考えたのか —

保科善四郎(駱駝)は、戦争一本槍の草案を読んで当惑したという。「これでは、戦局の実情に合わないが、時間的に根本的修正は間に合わない」。米内(淵)に「どうしましょうか」と伺いを立てると、米内は笑いながら「これはこれでよい」と言う。

保科には、すぐ米内の意図が推察できた。「終戦は早くやらなければならないが、それは六巨頭以上で考える。その他軍官民全ての者はかえって一致結束、戦う姿勢を示して置くことが終戦をうまくやるには大切なことだ。これは表向きのものであるから、戦争一本のことを高唱しておくだけでよろしい」というのだ。

保科 善四郎(ほしな・ぜんしろう)

明治24(1891)～平成3(1991) 宮城県生まれ。海軍中将。軍務局第1課長、兵備局長を経て昭和20年5月軍務局長。戦後30年から42年にかけて自民党衆院議員

東郷 茂徳(とうごう・しげのり)

明治15(1882)～昭和25(1950) 鹿児島県生まれ。駐独・駐ソ大使を経て昭和16年東条内閣外相。20年4月再び鈴木内閣外相となり、終戦に尽力。東京裁判で禁固20年の判決を受け、拘禁中に病死

▽統帥部が「本土決戦」の決意を披瀝

鈴木(訃)が「帝国現下の情勢は真に危急にございます。いわば、死中に活を求める立場にあると思いますが、これはもはや、知恵とか才覚とかをもって能くしない所、簡明直截、右顧左眄することなく、まっしぐらに、所信に向かって邁進するほかないのであります」強気の挨拶をし閉会

木戸は「時局收拾試案」を起草した

天皇は、すぐ木戸を呼ばれた。「こういうことが決まったよ」ただそれだけ言って会議内容の書類を渡される。そんなことは、かつてなかったことだし、「みな誰か言い出すのを待っているようだ」とも洩らされる。こんな状況で本土決戦を迎える無理は誰もが気付いているのに、問題は誰が言い出すのか。木戸に「やれ」と暗示されているようでもあった。

木戸が御前を下がってくると、高橋三郎(勲)が待っていた。「木の大砲で演習をしているんですよ。ああいうものを国民に見せたら、とても士気は持ちません」木戸は「政治を軍の手から取り戻さなくてはならない。舵を百八十度転換させるため、『猫の首に鈴をつける役割』を自分がしなければならない」そう決意し、その夜、時局收拾試案を起草した。

▽具体的には 天皇の親書携行の使節を
ソ連に送り 和平仲介を 依頼しようというもの

●日本の終戦工作は、「ソ連一本槍」に

▽木戸が 9日 試案を 天皇に見せると

満足のご様子で「速やかに着手するように」

▽木戸は 6巨頭の「ソ連仲介」の合意を知らず

6人を 各個撃破しよう と 行動を起こす

▽東郷(勲)は 対ソ交渉を 元首相広田弘毅に依頼

▽広田が「散歩のついで」と 箱根強羅ホテルに

マリク(勲)を訪ねたのが 6月3日

翌日の夕食招待に 漕ぎ着けたが…

▽マリクは にこやかに 対応していても

のらりくらり 回答引き延ばしに

本国への報告も 電報ではなく 伝書使

木戸日記(6月8日)

一時五十分より二時二十五分迄、御文庫にて拝謁。一旦帰宅。…時局收拾の対策試案を起草す。…

一、戦局の收拾につき、この際果敢なる手を打つことは今日の我国に於ける至上の要請なり。…

一、極めて異例にしてかつ誠に畏れ多きことにて恐懼の至りなれども、下万民のため、天皇陛下の御勇断をお願い申上げ、左の方針により戦局の收拾に邁進するの外なしと信ず。

一、天皇陛下の御親書を奉じて仲介国と交渉す。…

一、御親書の趣旨…世界平和のため難きを忍び極めて寛大なる条件を以て局を結ばんことを御決意ありたることを中心とす。…

……なぜ、ソ連だったのか……

6月1日には、南原繁(勲)と高木八尺(勲)が木戸を訪ねて来て、グルー(元)が國務次官になり(聊19年11月27日)、國務省が日本派で占められている機会をとらえ、「アメリカと直接交渉すべきだ」と、進言したばかりだった。

木戸は「ソ連を選んだのは、仲介が小国では困るし、陸軍もソ連に顔が向いているんだから、入りやすいと思ったんだ」東郷(勲)も同じ考えで「軍を終戦に引っ張って行くには、ソ連の対日参戦を防ぎたいという軍側の気持ちに一応乗って、ソ連に話を持ちかけ、いよいよ最後の頼みの綱もダメだということを納得させる必要があった」と、言っている。

南原 繁(なんばら・しげる)

明治22(1889)～昭和49(1974)香川県生まれ。大正15年東大教授となり、昭和20

— 佐藤尚武(駐ソ大使)から至急電報(6月8日附) —

「ドイツ壊滅の今日、ソ連として何を苦しんで、ソ米関係を犠牲にしてまで、日ソ関係の増進を考えるであろうか。今日において、中立態度の維持が関の山であって、戦局の発展如何によっては、それさえ困難になるであろうと覚悟しておかねばならぬどころか、ソ連がわが弱みにつけこみ、豹変して、われに武力干渉さえ辞さぬ決意を示したとしても、わが方としては如何ともし難いことである」

▽瀬島(中)は「九月までにソ連参戦」を警告していたし 藤村義朗(海軍中)もスイスで ダレス機関との接触に 成功していた
▽どうして こうした情報が 最高会議に 上げられなかったのか？
情報が どこかで止まってしまい 全員の 共通認識に ならない
戦争中の日本の 組織的欠陥だった

●鈴木 の施政方針演説をめぐり、「天祐天罰事件」

…… 6月8日に第87臨時議会在が召集された ……

議会は「沖縄の戦局悪化に鑑み、政府の今後に対する態度を明らかにして国民の覚悟を促し、国内結束を図るため議を開いてほしい」と要請してきた。

米内(海)は「いま議を開けば主戦論のみが強調され、勢いの赴くところ、取り返しのつかない約束をさせられる羽目になる。また、政府が少しでも和平の意図を悟られるようなことでもあれば、議会は紛糾し、收拾がつかなくなる」こう言って反対したが、反対理由となると「空襲で議員の身辺が危険」くらい。

ところが内ヶ崎作三郎(衆議院議員)が「我々は国のためには、兵士と同様、身命など投げてかかっています。議を尊重して下さい。戦時緊急措置法の如き重大問題を緊急勅令などで片付けるのは憲政の常道に反します」鈴木に膝詰め談判し、鈴木も召集に同意した。

年3月法学部長。12月東大総長。占領下、学問の独立を主張、全面講和を唱え、吉田首相と対立。45年日本学士院院長

高木 八尺(たかぎ・やせか)

明治22(1889)～昭和59(1984)東京生まれ。大蔵省を経て大正13年東大教授。米政治外交史研究の第一人者で昭和42年文化功労者。著に「米国政治史序説」

広田 弘毅(ひろた・こうき)

明治11(1878)～昭和23(1948)福岡県生まれ。昭和5年駐ソ大使。斎藤、岡田内閣外相。昭和11年二・二六事件直後首相。東京裁判では文官中ただ一人絞首刑に

佐藤 尚武(さとう・なぶたけ)

明治15(1882)～昭和46(1971)大阪生まれ。ベルギー、フランス大使を経て昭和12年林内閣外相。17年ソ連大使。22年参院議員(選3回)。24年参院議長

藤村 義朗(ふじむら・よしろう)

明治40(1907)～平成4(1992)大阪生まれ。海軍中佐。昭和15年ドイツ駐在武官補佐官。20年3月スイス駐在武官となり終戦工作に当たる。戦後、貿易会社経営

内ヶ崎 作三郎(うちがさき・さくさぶろう)

明治10(1877)～昭和22(1947)宮城県生まれ。早大教授を経て大正13年、憲政会から代議士に当選し以後当選7回。昭和16年から敗戦まで衆院副議長

戦時緊急措置法

国民総武装の法的根拠として、国家総動員法よりもっと強力な権限を政府に与えようというもの。6月12日に議会で可決、22日公布された。

▽鈴木は 施政方針演説(9日)で 叱咤激励をした後
「私は多年側近に奉仕して、深く感激して居る所
であります、恐れ多き極みながら世界に於て
我が天皇陛下ほど、世界の平和と人類の福祉と
を、冀求遊ばさるゝ御方はないと信じて居るの
であります」と述べ こう続けた

鈴木「天罰演説」

「私は嘗て大正七年練習艦隊司令官として、
米国西岸に航海致した折、桑港における歓迎
会の席上、日米戦争観につき一場の演説を致
したことがあります。その要旨は、日本人は決
して好戦国民にあらず、世界中最も平和を愛
する国民なることを、歴史の事実を挙げて説
明し、日米戦争の理由なきこと、若し戦へば必
ず終局なき長期戦に陥り、殉に愚なる結果を
招来すべきことを(説き、太平洋は名の如く平
和の海にして、日米交易の為に天の与へたる
恩恵なり。若し之を軍隊輸送の為に用ふるが
如きことあらば、必ずや両国共に天罰を受く
べしと)警告したのであります。然るに其後二
十余年にして、米国はこの真意を諒得せず、不
幸にも両国相戦はざるを得ざる結果に至りま
したことは、誠に遺憾とする所であります。

しかも今日、我に対して無条件降伏を揚言し
て居る様に聞いて居りますが、かくの如きは
正に我国体を破壊し、我民族を滅亡に導か
んとするもので、これに対して我々の執るべ
き道は唯一つあくまで戦ひ抜くことでありま
す。(新聞発表では情報局によりゴシックの箇所が削除された)

▽7日の閣議の後 迫水が 閣僚に草稿を見せると
みんな 天罰の箇所が「問題になりそうだ」

下村宏 国務相(備前職)が

「両国共に天罰」に代え「天譴必ずや至るべし」

「アメリカだけが 天のお叱りを

受けるだろう」と聞こえるように 直した

▽翌朝 迫水が 鈴木に修正箇所を示すと

「私はサンフランシスコでは、まさに原案の通り
に演説したのだ。それではそもそも演説する意
味はなくなった」 結局 原案に戻された

鈴木は、何を考えたのか

鈴木一(朗、備前職)は、「父は実は、こ
の議会を通じて、アメリカに呼びか
けるチャンスをつかもうと、外交秘
策を秘めていたのだ」

一つは、議会を重んずるアメリカに
対して、日本の国政はこんな急場にな
っても、議会尊重の平常心を失っ
てはいないぞという国際的パフォー
マンス。もう一つは、平和を願う天皇
であり、平和を愛する日本国民なの
だ。それなのに、連合軍は無条件降伏
を要求し、日本に最後の一人まで戦
争を続けさせようというのか。「無条
件降伏要求」の翻意を促し、「国体の
保存を含めた降伏条件を提示するな
ら応ずるぞ」。こういった鈴木内閣の
姿勢を、「暗黙のうちに表明するサイ
ンだった」と、一は言っている。

鈴木 一(すずき・はじめ)

明治34(1901)～平成5(1993) 千葉県生
まれ。鈴木貫太郎の長男。大阪営林局長
を経て農商省山林局長の昭和20年4月、
首相秘書官。戦後は日本馬術連盟会長

演説原稿の経緯

草稿を書いた迫水が「何かおっしゃ
りたいことがあったら、おっしゃっ
て下さい」と鈴木に聞くと、「別に何
もないよ、普通でいいよ」と言いなが
ら、とってつけたように練習艦隊航
海の話をする。迫水もピンときて「あ
あ、これを書けということなんだな」
と、前後の配列などを考え、苦心して
この話を挿入したという。

鈴木のテーブル・スピーチの区切り
で通訳したのは艦隊参謀佐藤市郎大
尉で、岸信介、佐藤栄作元首相の長兄。
鈴木は自伝の中で「非常に英語の達
者な人であった。司令官の日本語演

●小山亮(翻誌)は、11日の委員会で追及した

「護国同志会」

所属代議士29人と小会派ながら、会員には橋本欣五郎大佐などの軍国主義者がいて、陸軍の代弁役として活発な活動をしていた。

小山は長野県出身、当選3回。若い頃船員時代に労働組合活動をしたことがあり、激しい攻撃をすることで知られていた。

▽宣戦の詔勅に「天祐ヲ保有シ」とあるのを取り上げ「日本国民は、天祐神助が我らの上にあると確信して、この戦いに臨んでいるにもかかわらず、戦いをすれば両国とも天罰を受けると首相が述べたのは、どういうことか。これは間違いか、勘違いか、取り消しを願いたい」

▽小山の狙いは 鈴木・米内の「海軍内閣」を倒すこと
委員会は 騒然となり

委員長が「暫時休憩」を宣言して やっと散会

▽昼すぎ 政府委員室に 護国同志会の「声明ピラ」
声明書

「吾人同志ハ飽クマデモ、其ノ不忠不義ヲ追及シ、モッテ斯克ノ如キ敗戦醜陋(しゅうろう)ノ徒ヲ掃滅シ、一億国民挙ゲテ必勝ノ一路ヲ邁進センコトヲ期ス」

▽そこへ 気になる情報「この声明が、
議会内の陸軍政府委員室で印刷されたのでは」
紙だって 簡単には 手に入らない時代
陸軍が 倒閣運動に 加わったのでは？

▽これを 押さえたのは 阿南(翻)だった
阿南は この朝 新たに編成した
15人の連隊長の 軍旗親授式に出ている
議会の騒ぎを知らなかったが 陸軍省に戻ると
「省内の一部で、阿南内閣という予想のもとに
閣僚の顔触れを色々相談しているらしい」

▽こんな報告を受け 阿南はすぐ
幹部を集めて 厳しく 注意した
阿南の 厳然とした姿勢に
一部将校と気脈を通じて 倒閣を狙っていた
「護国同志会」も 一遍に 腰砕けに

…… 説よりは佐藤君の英語演説の方がよほど能弁だったと、大笑ひになった」と書いているが、中将で病没した。

下村 宏(しもら・ひろ)

明治8(1875)～昭和32(1957) 和歌山県生まれ。台湾総督府総務長官で退官。大正11年朝日新聞に入り副社長。二・二六事件直後に広田内閣の閣僚候補に挙げられたが、陸軍の反対で流れ、日本放送協会会長など歴任。昭和20年4月鈴木内閣内閣事務相・情報局総裁。「海南」のペンネームで、著に「終戦記」、「終戦秘史」

橋本 欣五郎(はしもと・きんごろう)

明治23(1890)～昭和32(1957) 福岡県生まれ。陸軍大佐。昭和5年「桜会」を結成、国家改造運動を進め、翌年の三月事件、十月事件(翻動-テ-誦)の首謀者。17年から衆院議員。東京裁判でA級戦犯として終身禁固刑を受けたが、30年仮出所

…… 議会速記録から ……

録「それから、天祐を保有される、天皇陛下のこの有り難い天祐とは全く違った意味でございますから、どうぞこの点ご了承願いたい。これは、天祐を保有するというお言葉の意味につきましては、学者の間にも非常な論議のあることであります。ただいま申し上げることはできませんが、それと一(発言する者多し)一ご了承願います。(不敬ではないか、ご詔勅ではないか、委員長、委員長と呼び、聴取するあたわず)

「大本营機密日誌」から

「このような議会の空気に省部内でもいろいろの議論が起きたが、翌十二日省部内の少壮連中の空気を激化せしめない目的で、大臣の命により

▽鈴木は「やっていましたね、賑やかなものでした」
平然たるものだったが
迫水は「そうも言うておられず 各派を回り
首相答弁取り消し やり直して 収めた

●米内(鮎)が、辞意を洩らす

▽「戦時緊急措置法案」を通すには 会期延長が必要
11日夕 臨時閣議で 左近司政三(麟湘)が

「こんな無茶な議会は、停会にした方がいい」
米内も 停会か 解散を主張し

「この意見を思い付きで言うのではない。私の
意見が容れられなければ、私は私として善処
する。もともと、内閣には迷惑をかけない」

▽米内が 辞表を出せば

鈴木内閣は 閣内不統一で 総辞職になる

▽翌12日早朝 陸相秘書官が 左近司訪ねて来て
鉛筆で走り書きの 阿南の手紙を手渡した

— 阿南の手紙 —

「昨夜の米内海相の発言は事重大と思う。若し海相が辞任することにでもなったら、破局を招くことを恐れる。私は今朝、陸軍砲兵学校の卒業式に陛下に扈從して行かねばならぬので、貴下から海相の辞意を思い止まらせるよう至急尽力願いたい」

▽左近司が すぐ 海軍省へ行って 手紙を見せると
米内は「陸相がこんなことを考えていてくれたのか」そして「鈴木さんに、もっとしっかりしてもらわねば」と 苦笑したという

▽阿南が 本当に「本土決戦」を考えていたのなら
鈴木内閣倒閣は むしろ 望むところだったはず
左近司は「阿南が鈴木内閣の存続、即ち終戦の実現を望んでいた証左と信じる」

▽阿南は 表向きは

陸軍の強硬論を 代表する役割を 演じながら
剛毅な意志で 鈴木の内閣路線を 援護していた

▽左近司は「鈴木が表面強硬を装っていたのは、阿南陸相を閣内に留めておく必要からでは…」

●米内の辞意には、鈴木(鮎)の決断を促す考えも

各課高級課員を集めて、プリントしたもので、議会の空気を正しくつたえ 言論の戒むべきを伝えた。これを見た大臣は、正直にそのプリントを迫水書記官長に渡し、大臣の真意を伝えたのであった」

左近司 政三(さこんじ・せいそう)

明治16(1879)～昭和44(1969)大阪生まれ。海軍中将。海軍次官を経て佐世保鎮守府長官の昭和9年、条約派追放人事で予備役。10年以降北樺太石油会社社長、近衛内閣商工相。20年鈴木内閣國務相

…… 阿南についての証言 ……

下村(麟湘)「私は阿南陸相の鈴木総理に対する態度が実に礼節に富み、情にあふれているのを見て、往年、近衛内閣時代の東条陸相が総理に対し不遜な態度を示し、閣議に出席を拒んだりしたことと対比して、深き感慨に打たれていたのであるが、あの阿南陸相の態度は鈴木内閣の存続を念願する自ずからなる表れだったと思う」

松谷誠大佐(誠謙)「いずれ、終戦せねばならぬという考えは根本的にあったが、特に名誉ある終戦を望んでいた。それが戦局の推移につれ次第に鈴木、米内、東郷と近寄った考えになっていった。戦争継続派に自分の考えを悟らせないように注意しながら、最後に時期が来たら講和に持っていく。この肚の中のカラクリを出さずに肚芸でやって行かねばならぬというのが、阿南さんの苦勞するところだった」

鈴木「父は常々肚を割って話できるのは、阿南以外にないと言っていた」

▽5月29日 軍令部総長を

及川古志郎から 豊田副武に代えたが
この人事も 陸軍を 終戦に同意させる狙いから
及川の話

「米内海相から参謀総長の梅津美治郎を説得
するよう要望されたが、自分には自信がなか
った。そこで米内は、豊田が梅津と同郷の大分
県出身であることから、こうした機微な話を
するには都合がよいと考えたのだ」

▽ところが 鈴木は相変わらず 陸軍ばりの強硬論
鈴木一は「鈴木、米内は、肚と肚の話し合いの人
であった。言葉では言わぬ人であった」
米内には 鈴木の本心が 掴めなかったようだ

— 二人の終戦決意を結びつけた木戸 —

木戸は議会在議が終わるのを待って13日、まず米
内に時局收拾案を示した。米内は賛成したが、
「どうも、今もって首相の考えが充分判明しな
いので、閣内においてこの方面に踏み出すこ
とも出来ない」木戸は「この際、陸海軍から切
り出させるのは無理だ。政治家が悪者になる
べきだ」と、暗に「政治家とは自分のことだ」と
ほのめかした。高木少将の話では、米内はこの
段階で「内大臣もそこまで考えているのか」と
辞意を撤回することにしたという。

その後で来た鈴木も、「是非やりましょう」と
言いながら、「しかし海軍大臣は、戦争を続け
る気持ちが強いようだ」そこで木戸が「それ
はおかしな話だ。海軍大臣は総理が強いと言
っている、あなたは海軍大臣が強いと言う。一
体この問題について話し合っていないのです
か」鈴木は頭を叩いて「実はまだ、そんな話し
合いをするまで行っておらんだ」木戸は至
急話し合うことを要請し、日記に「憂いを同じ
うせらるる心境をきき安心す」と書いている。

●最高指導者が、まだ終戦を口にするのをためらう

▽鈴木内閣が「終戦内閣」になるには

同じ海軍の 米内の支持が 絶対必要だった

松谷 誠(まつたけ・せい)

明治36(1903)～平成10(1998)福井県生
まれ。陸軍大佐。昭和19年7月、参謀本部
戦争指導班長の時、サイパン陥落に「早
期終戦」を訴え、支那派遣軍参謀に左遷
される。11月陸相秘書官に戻り20年4月
首相秘書官。戦後、自衛隊北部方面総監

及川 古志郎(おしかわ・こしろう)

明治16(1883)～昭和33(1958)岩手県生
まれ。海軍大将。昭和15年近衛内閣海相
となり、海上護衛司令長官を経て19年8
月軍令部総長。20年5月軍事参議官

豊田 副武(とよだ・そむ)

明治18(1885)～昭和32(1957)大分県生
まれ。海軍大将。軍務局長、第4、第2艦隊
長官を経て昭和19年5月連合艦隊長官。
20年5月軍令部総長。戦犯で収容された
が、23年釈放。著に「最後の帝国海軍」

梅津 美治郎(うめづ・よしじろう)

明治15(1882)～昭和24(1949)大分県生
まれ。陸軍大将。陸軍次官を経て昭和17
年関東軍司令官、19年参謀総長。A級戦
犯で終身禁固刑を受け拘置中に病死

…… 及川の話 ……

「終戦を企図して居ることが陸軍の
中堅層に判れば、首相でも誰でも敗
戦主義者の烙印を押され、一日も政
治の指導的地位に留まることは許さ
れない有様だった」(戦後GHQ歴史課の聴取)

— 「大理」の出番だったが… —

鈴木は海兵14期、米内が29期で年齢
も一回り離れてはいたが、せめて鈴
木の1期後輩の岡田啓介元首相が早い
時期に間に入っていたら…。

岡田は回顧録に「わたしはこんどは
是非とも鈴木を出して、いよいよ最

▽肚の探り合いで 2か月以上 空費したことが
終戦の決断を 遅らせる 一因にも
▽天皇は 相次いで 深刻な報告を受けていた

「昭和天皇独白録」から ……………
「梅津は会議の翌日満州から帰って来たが、
その報告に依れば、支那にある我が全勢力を
以てしても米の八ヶ師団にしか対抗出来ぬ状
態であるから、若し米が十ヶ師団を支那に上
陸させたら、到底勝算はないと語った。梅津が
こんな弱音を吐くことは初めてであった」

▽12日には 天皇の特命で 戦力査閲使として
軍需工場や 特攻基地を 見て回った
長谷川清(海軍大将)が 実情を報告した
1日50本 魚雷を作っていた工場が
たった 1本しか 出来ない
自動車の中古エンジンを 急造の小型船に
装備したのが 特攻兵器として用いられ
特攻隊員の訓練も 甚だ不足している
特攻兵器の前途多難

野田六郎大佐(海軍少将)は翌日、天皇から長谷
川の復命書を読むように言われた。その内容
は、4月から5月にかけて、天皇の御差遣として
九州各地の特攻基地を回った際、司令官、参謀
から受けた威勢のいい説明とは黒と白ほどの
違い。野田は日記に「特攻兵器の前途猶幾多困
難あるを知る」と書いている。

●天皇には、ますます「終戦を急がねば…」

▽木戸は 18日までに 6首脳から
時局收拾案に 同意を 取り付けていた

▽残るは 御前会議決定(8日)の

「飽く迄戦争を完遂し…」の関係を どうするか

▽木戸は 天皇から「終戦についても、従来の観念に
囚われることなく、速やかに具体的研究を遂げ、
実現に努力せよ」と 言って頂こうと

6月22日に 6首脳会議を開くことにした

後の決断をしてもらおうと思った」
と書いているし、内閣のつかい棒
として迫水を書記官長に送り込んで
いる。東条内閣を倒した時、米内を現
役に復帰させ小磯内閣海相としたの
も、岡田の働きかけだった。

吉田茂は岡田を評して「狸も狸、そ
れも国を思う大狸だ」こう言ってい
たが、まさに岡田の出番だったが…。

岡田 啓介(おがた・けいすけ)

慶応4(1868)～昭和27(1952) 福井県生
まれ。海軍大将。連合艦隊長官海経て昭
和2年田中内閣海相。8年斎藤内閣海相。
9年首相。11年二・二六事件で襲撃され、
危うく助かり内閣総辞職。戦争中は、東
条内閣倒閣、和平推進に、重臣の中心と
なって動く。著に「岡田啓介回顧録」

長谷川 清(はせがわ・きよし)

明治16(1883)～昭和45(1970) 福井県生
まれ。海軍大将。駐米大使館付武官、海
軍次官、昭和12年支那方面艦隊長官。15
年台湾総督。20年2月特命戦力査閲使に
任命、軍需工場、特攻基地を見て回る

吉田 茂(よしだ・しげる)

明治11(1878)～昭和42(1967) 東京生ま
れ。外務次官、駐伊、駐英大使歴任。昭和
20年4月和平工作で憲兵隊に逮捕。戦後
東久邇、幣原内閣外相。21年鳩山一郎の
公職追放で自由党総裁となり首相。5次
の内閣を組織、講和条約、日米安全保障
条約を締結。29年造船疑獄で総辞職。元
老として大きな影響力を持った。国葬

「本土決戦 日本の国力は…」 関係年表

年	日	出来事	年	日	出来事
昭和6 11	1931	9.18 柳条湖で満鉄爆破、満州事変始まる	昭和20	1945	4.7 鈴木内閣成立。陸相に阿南惟幾、海相に米内、鈴木首相、「屍を越えて進め」と放送。戦艦大和、沖縄特攻で撃沈される。硫黄島のP51戦闘機、関東来襲
	1936	2.26 二・二六事件。陸軍青年将校が斎藤實内大臣、高橋是清蔵相ら殺害、鈴木貫太郎侍従長重傷。岡田啓介首相は難を免れたが義弟の松尾伝蔵大佐射殺		4.8 陸軍、本土決戦に備え東日本に第1総軍(阿部)、西日本に第2総軍(島)、航空部隊統一指揮のため航空総軍創設	
	1937	7.7 盧溝橋事件勃発。支那事変始まる		4.9 外相・大東亜相に東郷茂徳外相	
	1939	9.1 第2次世界大戦始まる		4.12 ルーズベルト大統領死去	
	1940	9.27 日独伊三国同盟、ベルリンで調印		4.13 15歳~60歳の男子、17歳~40歳の女子、いつでも戦闘に狩りだされることに	
	1941	4.13 日ソ中立条約、モスクワで調印		4.20 陸軍、「本土決戦訓」を全軍に布告	
		6.22 ドイツ軍、ソ連に侵攻。独ソ戦始まる		4.22 参謀本部、東郷に対し工作申し入れ	
		10.18 東条英機内閣発足。東条は陸相兼任		4.25 海軍総隊を創設し、全作戦部隊指揮。陸軍「国民抗戦必携」を一般に配布	
	1942	12.8 太平洋戦争始まる。真珠湾攻撃		5.2 藤村義朗海軍中佐、スイスで「ダレス機関」と接触、終戦工作を始める	
		6.5 ミッドウェー海戦。主力空母4隻喪失		5.7 ドイツ、連合軍に無条件降伏	
	1943	8.7 米軍、ガダルカナルに上陸開始		5.11 最高会議、構成員6人だけの首脳会議	
1944	9.8 イタリア無条件降伏	5.14 6首脳、「和平にソ連仲介」の方針決定			
	11.1 兵役法改正、兵役最終年齢を45歳に	5.23 大本営参謀瀬島龍三中佐が内閣書記官長の迫水久常を訪ね、「ソ連参戦前に戦争終結を策すべき」と進言			
	12.24 徴兵年齢を臨時特例で1年早め19歳	5.29 軍令部総長に豊田副武大将			
	6.6 連合軍、仏ノルマンディ上陸	6.1 東大教授南原繁と高木八尺は内大臣木戸幸一に「対米直接交渉」を提言			
	6.15 米軍、サイパン島に上陸開始	6.3 広田弘毅元首相、ソ連大使マリクを強羅ホテルに訪ね、対ソ交渉を始める			
	7.7 サイパン島守備隊玉砕	6.6 最高会議「戦争指導ノ基本大綱」審議			
	7.18 東条内閣総辞職	6.8 御前会議で「基本大綱」決定。木戸「ソ連に仲介依頼」の時局収拾案を起草。佐藤尚武駐ソ大使、「日ソ友好強化は絶望的」との意見電報(10日)◆第87帝国臨時議会を召集			
	7.22 小磯国昭・米内光政連立内閣成立。米内は現役に復帰し海相	6.9 天皇、木戸試案に「速やかに着手を」◆鈴木首相、施政方針演説◆梅津美治郎参謀総長、中国の悲観的状況を上奏			
	8.5 大本営政府連絡会議を廃止して最高戦争指導会議設置	6.10 米潜水艦、日本海侵入。小樽沖で雷撃			
	9.12 人間爆弾の「桜花」試作1号機完成	6.11 護国同志会・小山亮代議士、鈴木演説を攻撃し「天祐天罰事件」の倒閣騒ぎに。阿南陸相、これを押さえる			
	10.1 「桜花」特攻の第721航空隊、神之池基地に編成。「神雷部隊」と命名	6.12 戦力査閲使・長谷川清海軍大将、特攻基地、軍需工場の実情を天皇に報告◆「戦時緊急措置法案」成立(22日)			
	10.20 米軍、レイテ島に上陸	6.13 木戸、終戦工作に鈴木、米内に時局収拾試案を示し、同意を得る			
	10.25 神風特別攻撃隊、レイテ沖に出撃	6.22 最高会議構成員の御前会議。天皇、終戦につき「速やかに研究し実現を」			
	11.1 サイパン発進のB29、東京を初偵察	6.23 牛島満第32軍司令官ら沖縄南部摩文仁で自決。沖縄の組織的抵抗終わる			
	11.3 米本土へ「フ号作戦」(風船)始まる	6.29 トルーマン、九州作戦(11月1日)承認			
	11.24 B29、中島飛行機など東京を初空襲	7.3 主食配給量1割減を閣議決定(11日)			
	11.27 米ハル國務長官が病氣退任。元駐日大使のグルーが國務次官に就任	7.17 米英ソ三国首脳、ポツダム会談開く			
20	1945	12.19 大本営、「レイテ決戦放棄」を決定	7.26 無条件降伏要求のポツダム宣言発表		
	1.9 米軍、ルソン島リンガエン湾に上陸	8.6 広島に原爆投下(9時)長崎			
	1.19 大本営、本土決戦の「決号作戦」策定	8.8 ソ連、日本に宣戦布告			
	2.4 米英ソ三国首脳、ヤルタで会談	8.9 ソ連軍、満州、朝鮮、樺太で侵攻開始			
	2.10 スターリン、ルーズベルトに「ドイツ降伏後2、3か月の対日参戦」を約束	8.15 敗戦。鈴木内閣総辞職(17日入閣内閣)			
	2.16 関東地区に艦載機来襲、2日間にわたり1,600機。第10飛行師団51機を失う				
	2.19 米軍、硫黄島上陸				
	2.26 大本営、150万の根こそぎ動員決定				
	3.10 334機のB29、東京大空襲。江東全滅				
	3.17 硫黄島の日本軍守備隊全滅				
	3.18 「決戦教育措置要綱」を閣議決定。4月から国民学校初等科を除き授業停止				
	3.21 「桜花」特攻の「神雷部隊」出撃し全滅				
	3.23 国民義勇隊組織法案を閣議決定				
	3.26 米軍、沖縄本島南の慶良間列島上陸				
	3.27 B29、関門海峡に機雷1千個投下				
	3.29 陸軍、召集規則を改正し満17、18歳の全ての男子の防衛召集を可能に				
	4.1 米軍、沖縄本島嘉手納海岸に上陸				
	4.5 小磯内閣総辞職、鈴木貫太郎に大命◆ソ連、日ソ中立条約不延長を通告				